文 **リッカルド・ヴァレンテ**　翻訳 **小金井 良夫**

ヒンジ付カバーにおける伝統と革新

ヒンジ付ダストカバーは元来、狩猟、後には塹壕戦という厳しい使用環境の下で貴重なタイムピースを保護するという目的を持っていた。しかし今日、パテック フィリップによりその存在意義が新たに解釈され、大きな変貌を遂げたのである。

（右）ケース側面からラグに向かってデリケートにカーブした溝が、カラトラバ5227モデルのエレガントなフォルムを強調する。（左）5227モデルは、サファイヤクリスタル・バックを保護するダストカバーを備えている。しかしそれだけではない。ダストカバーとケースをつなぐヒンジが、外からまったく見えない構造であるため、鑑識眼のある愛好家もその存在に気づくことはない。

［右ページ］新しい5227モデルは、「機能がフォルムを決定する」というバウハウスの哲学を反映した、美しいシンプルな12層のラック・アイボリー文字盤を備えている（上）。イエロー、ホワイトまたはローズゴールド仕様がある（下）。［当ページ］わずか9.24mmの厚さにもかかわらず、5227モデルは、気が付かないほど小さな爪で開閉できるヒンジ付ダストカバーを備えている。ダストカバーがあまりに巧妙に統合されているため、過去2年にわたり開発を直接指揮したティエリー・スターン社長が父のフィリップ・スターン名誉会長に完成したモデルを見せた時、フィリップ・スターン名誉会長も一瞥しただけではカバーの存在に気づかなかったという。今日の多くのサファイヤクリスタル・バック付タイムピースでは、言葉を彫り込んでパーソナライズすることができないが、ダストカバー付のこのモデルではそれが可能である。ヒンジ付カバーは、1900年代初頭の「ハンター」懐中時計へのオマージュでもある。

パテック フィリップのすべての愛好家、コレクターが知るように、カラトラバ・コレクションは1932年、スターン家がパテック フィリップを買収したのと同じ年に発表された。この年に製作された最初のカラトラバが、「機能がフォルムを決定する」というバウハウスの哲学理念に従って創作された伝説的な96モデルであった。タイムピースの指針が円を描くのであるから、ケースも完璧な円でなければならないと考えられたのである。今日もカラトラバ・コレクションは、コンプリケーション機能を持たないラウンド型タイムピースのみから構成されている。カラトラバの名はシンプルさとエレガンスの代名詞となった。その真髄ともいえるモデルが、クルー・ド・パリ・ベゼルを備えた5119モデルであろう。クルー・ド・パリのモチーフは中世までその起源を遡ることができるが、ルイ13世時代の家具に多用された。

第二次世界大戦中、最初期のラウンド型腕時計が現れた。エレガントというには程遠いこれらの時計は、当時流行していた両蓋タイプの懐中時計をベースとしていた。両蓋懐中時計は英国では「ハンター」と呼ばれたが、それは狩猟をはじめとする野外の活動時によく使用されたからであった。重要なのは、これらの懐中時計が、文字盤とガラスを埃、傷、その他の損傷から保護するためのヒンジ付カバーを前面に備えていたという点である。

塹壕戦と近代砲術の出現により、精密な時間計測が不可欠となった。士官は時刻を即座に知るため、外套のボタンを外し、内ポケットから時計を取り出すのではなく、手首に着用することのできる時計を必要とした。そのため、両蓋懐中時計の12時と6時位置にラグを付けただけのものがまず腕時計として使われた。両蓋懐中時計はリュウズが3時位置にあったため、ラグとバッティングせずきわめて好都合であった。蓋のないオープンフェース（レピーヌ式）と呼ばれる懐中時計では、リュウズが12時位置にあったため不向きだったのである。塹壕戦で使われた手首に着用する懐中時計は、やがて今日オフィサータイプと呼ばれる時計に進化して行ったが、ケースバックを保護するカバーが両蓋懐中時計としてのルーツを示している。

第一次世界大戦後、腕時計は広く普及し、ほとんど懐中時計に取って代わるに至る。最初のカラトラバが世に出た当時、すでに腕時計の優勢は圧倒的となっていた。懐中時計より使いやすく、より製作コストが安かったため、兵卒や民間人でも購入できたのである。戦後人々がより多忙となり、時間に正確になるにつれ、腕時計は産業界、経済界に不可欠となった。

パテック フィリップには「オフィサー」という特定のコレクションがあるわけではない。ネジ止め式バー（バネ棒）やケースバックのカバーを特徴とするオフィサータイプのケースは、多くのコンプリケーテッド・ウォッチに採用されている。これまでパテック フィリップのカラトラバ・コレクションに属するオフィサー・モデルは、5153モデルのみであった。両蓋懐中時計に溶接した趣の、軍用を思わせる直線のラグと横開きのヒンジ付カバーにより一目でそれと分かるモデルである。

新しい5227モデルはカラトラバ・ファミリーに属すると同時に、ヒンジ付カバーをも備えている。サファイヤクリスタル・バックを保護するゴールドのヒンジ付カバーは、伝統的にオフィサー・モデルのみに限定され、その重要な一要素をなしてきた。5227モデルのカバーは5153モデル同様、横開きであるが、右から左に開くという点が特徴である。さらにダストカバーとケースバックをつなぐヒンジが外からまったく見えず、鑑識眼のある愛好家もその存在に気づくことはない。その製作にはきわめて高度な技術が必要であることはいうまでもない。カバーは、ケースバックに設けられた極細のジョイントと縁により爪先で簡単に開閉でき、その仕組みは腕に着用した状態ではまったく見ることができない。カバーに刻まれた言葉を読むためか、またはサファイヤクリスタル・バックを通してパテック フィリップの自動巻ムーブメントを鑑賞するためにケースをごく近くから仔細に観察して初めて、ヒンジの存在を知ることができるのである。その結果、カラトラバのシンプルでピュアなラインを邪魔するものは何もない。

ではケースにはどのようなムーブメントが収められているのだろうか。新しい5227モデルは「コンプリケーテッド・ウォッチ」ではない。その機能はむしろシンプルであり、日付表示は年に5回、月末が31日でない月の終わりには調整を必要とする。永久カレンダーでも年次カレンダーでもなく、クロノグラフもミニット・リピーターもトゥールビヨンも装備してはいない。それにもかかわらずキャリバー324 SCは先端的なテクノロジーを搭載している。Silinvar®を素材とするSpiromax®髭ぜんまいが2万8800振動（1時間）／時（4ヘルツ）の精密で安定した振動数を生み出しているのである。Silinvar®は革新的なシリコンベースの新素材であり、スチールよりはるかに軽量で帯磁しないなど、数々の特徴を持つ。疑いもなくキャリバー324 SCは今日最先端のムーブメントである。

しかし5227モデルが他のカラトラバ・モデル、および他のダストカバー付オフィサー・モデルと比べても際立っているのは、技術的な特徴によってではなく、むしろ美的側面によってである。巧妙なインビジブル・ヒンジ付カバーに加え、眼を側面に移すと、ケース側面からラグに施され、デリケートにカーブした溝が目に入る。この溝はタイムピースにダイナミックな印象を与えると共に、そのエレガントでスリムなシルエットをさらに強調している。巧妙な構造のヒンジ付カバーを含むこのタイムピース全体のアーキテクチャーは、パテック フィリップの時計製作における技術革新のアプローチを典型的に示している。すなわち、19世紀の狩猟文化であれ20世紀の塹壕戦であれ、過去の遺産に賢く立脚した上で、シンプルなデザインやダストカバーを象徴的な次元にまで昇華させていくという手法である。バーゼルワールド2013において、パテック フィリップの新しい5227モデルは、「オフィサーと紳士」として期待に胸をふくらませる愛好家たちに紹介された。時を超越したクラシックであり、秘密のインビジブル・ヒンジ付カバーがオフィサーケースの伝統に新たな解釈を与えたという意味で、これ以上に的確な形容は見つけることができない。5227モデルこそは、伝統と遺産に深い尊敬を抱く21世紀の紳士のために創作され、製作されたタイムピースということができるだろう。 ✤

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」（patek.com/owners）にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。